

早稲田大学英文学会（文学学術院）・英語英文学会（教育・総合科学学術院）2013 年度合同大会
（2013 年 12 月 14 日（土）早稲田大学早稲田キャンパス 16 号館）

研究発表会（13 時 00 分～15 時 15 分）研究要旨

「憂愁のオード」とキーツの“passiveness” —— 詩人と思索 ——

教研 修士 1 年 岩本 浩樹

「憂愁のオード」（‘Ode on Melancholy,’ 1820）は、キーツの詩才が豊かに実を結んだ 1819 年の春に書かれた。多くの評家が認めているように、このオードは全三連の構成的バランスにすぐれており、凝縮された詩情を醸し出している。「憂愁のオード」において、詩人は逆説的な主張を展開する。曰く、憂愁は忘却や悲哀のうちではなく、美や喜びのうちに見出される。相反する要素の融合というモチーフはキーツの作品に特徴的にみられ、その詩作理念の根幹を成すもののひとつであった。詩人のこうした撞着融合的感性は、例えば『エンディミオン』（*Endymion*, 1818）における「熱烈な無関心」（“ardent listlessness”）（1: 825）といった表現によくあらわされている。「憂愁のオード」には詩人の撞着融合的感性が極めて凝縮された形で表現されているといえる。

詩人は友人ベンジャミン・ベイリー（Benjamin Bailey）に宛てた 1817 年 11 月 22 日の書簡のなかで「思索」（thoughts）よりも「感動」（sensation）を重視する姿勢を表明した。しかし詩人は後に考えを改め、弟のジョージとトムに宛てた 1818 年 1 月 24 日の書簡では“Nothing is finer for purposes of great productions, than a very gradual ripening of the intellectual powers”と述べている。物語性が排除された「憂愁のオード」からは、キーツのこうした思索的成長の軌跡を読み取ることができる。また上に引用した一節の直前で詩人は自己と“passiveness”との関わりについて述べている。詩人の言う“passiveness”の姿勢とは、1817 年 12 月の書簡のなかで言及した「消極的受容能力」（negative capability）に本

質的に通ずるものである。

「メランコリー」の概念は古代より時代とともに移り変わり、その含意は大きな振れ幅のなかで揺れ動いてきた。詩人に多大な影響を与えたロバート・バートン (Robert Burton) の『憂鬱の解剖』(*The Anatomy of Melancholy*, 1621) が概念のこうした変化に寄与したことは言うまでもない。本発表では、「メランコリー」の含意が長期の歴史の変遷をたどるなかで、キーツの提示した「憂愁」の位置づけと特質についてまず考察したい。その上で、「憂愁のオード」のとりわけ第二連にみられる受動的なモチーフに着目し、“passiveness”に関する意識の芽生えがキーツの思索的成長の核心をなすものであることを検証してみたい。

ワーズワース「廃屋」における荒廃する庭の意義

教研 博士3年 大石 瑤子

1797年春、ドーセット州のレイスタウンにおいて、ウィリアム・ワーズワースは、経済的困窮によって夫と子供を失った女性の物語詩「廃屋」(‘The Ruined Cottage,’ 1797) を執筆した。作品中には、主人公マーガレットの庭が日々の食料を育てるとともに、仕事を楽しみ植物を愛でるための庭として描かれる。マーガレットのような小農民 (cottager) が手入れし、日々の糧を得るために活用した実用的な庭をコテージ・ガーデン (cottage garden) と呼ぶ。「廃屋」が創作されたのは、ピクチャレスク熱の高まりや、貧困民の暮らしを改善しようというアロットメント運動 (Allotment Movement) の広まりの中で、コテージ・ガーデンが人びとの注目を集めはじめた時期であった。マーガレットの庭は現実の生活と密接に関わった庭であるがゆえに、農村の経済的困窮や戦争といった社会情勢を色濃く反映している。

実用的な庭を描写の対象とし、当時の農村の過疎化を描いた点で、ワーズワースの「廃屋」は、ゴールドスミス (Oliver Goldsmith) の『廃村』(*The Deserted Village*, 1770)に通じるものがあるだろう。ゴールドスミスは、上流階級の風景式庭園 (landscape garden) に見られる現実の庭や自

然から遊離した虚構性を批判した。しかしながら、彼が荒廃した庭そのものに焦点を当てているのに対して、ワーズワースは庭が廃れてゆく様子を時の経過にしたがって描いている。言い換えれば、ワーズワースの「廃屋」は庭の解体と再野生化の過程を描いている。なぜ、ワーズワースは、語り手に荒廃した庭の悲惨さを語らせるのか。あるいは、かつての庭の様子を家庭の幸せとして賛美させるのではなく、なぜ衰退する庭の様子を語らせるのか。今回の発表では、「廃屋」において、ワーズワースが庭の解体と再野生化を描いた意図を、18世紀後半から19世紀初頭の造園術における理論的論説の潮流を視野に入れつつ、読み解いていきたい。

時空間を超えるメランコリー『ブック・オブ・ソルト』におけるトラウマの味わい

教研 博士3年 渡邊 俊

2003年出版のヴェトナム系アメリカ人作家モニカ・トゥルン (Monique Truong, 1968-) の『ブック・オブ・ソルト (The Book of Salt)』は、モダニズム芸術が花盛りであった1930年代のフランスはパリを舞台とする作品である。ガートルード・スタイン (Gertrude Stein) とその伴侶アリス・トクラス (Alice B. Toklas) に仕えるホモセクシュアルのヴェトナム人シェフであるビンによる語りという斬新な手法に加え、物語終盤にスタインの幻の作品、“The Book of Salt” という入れ子構造的テキストを出現させるなど、トゥルン自身のデビュー作ながら意欲的な作品となっている。ピンは、作者トゥルンに拡張された視野——第二次世界大戦とフランス植民地からの独立、ヴェトナム戦争と冷戦、そして9・11などを知る現代的なパースペクティヴ——によって、西洋近代社会の結晶であるモダニズム芸術の審判スタインの日常生活の内側にシェフとして従事しながらも侵入する。それにより、ピンは旧支配国であるフランス、そして現代の覇権国家アメリカという二つの帝国の間隙で沈黙の声を響かせるポストコロニアルな主体として物語を語る。

本作品の時間軸は故郷ヴェトナムと1930年代パリの二つに大別でき

るが、その二つの時空間はビンのフラッシュバックによって接続され、読者はある種のタイムトラベルに巻き込まれることになる。実のところ、この頻繁な時空間の往来はビンの過去のトラウマ的喪失体験から生じているのである。それによってピンはメランコリー状態から抜け出せず、最愛の母、自分を虐待した「父」、故郷のこと、愛し合った恋人たちのことなどを繰り返し思い、ときに自らの身体を傷つけるほどである。

しかしながら、ビンのメランコリーは単なる病理として機能しているわけではない。本発表ではメランコリーの原因となるトラウマ的体験を追体験していくとともに、彼のメランコリーが本作品にどのような味わいを与えているかを見ていきたい。

修辞パターンに見る L1 と L2 ライティングの転移と評価の検証

教研 修士1年 辰野 有沙紀

本発表の目的は、「修辞パターンに見る L1（日本語）と L2（英語）のライティングの転移と評価」に関しての先行研究を再検討し、修士論文の基礎研究とするものである。L2 でのライティング能力を構成する要素の研究は数多く存在する。例えば Kamimura (1996) は L1 のライティング能力、Sasaki & Hirose (1996) は L2 の言語知識が大きく L2 でのライティングの質に関係すると述べている。

それらの要素と同様に重要であり、かつ L1（日本語）と L2（英語）のライティングで大きく異なるものは修辞パターンであると考ええる。日野 (2008) によると、一般的に日本語でのライティングは言いたいことを最後に書くことや起承転結で論を進めることが適切であると言われていたのに対して、英語のライティングでは主題を最初に明確にすることが求められている。このような修辞パターンの違いは日本人英語学習者にとって大きな負担になることは確かである。修辞パターンが L1 から L2 へ転移するかどうかの先行研究として Oi (1986) は英語で書くライティングに日本語での修辞パターンが使われていると指摘している。しかし Kubota (1998) は日本語から英語への修辞パターンの負の転移を認め

ていない。

そして L1 での修辞パターンを使い L2 ライティングを行った際の評価について Higuchi(1995) は日本人の書く英語のライティングの質に関係する要素として適切な修辞パターンを使うことを提案している。一方で Kubota(1998) はライティングの構成の質に修辞パターンは関係しないとの結論を出している。

このように修辞パターンの使用の転移、そしてライティングの質の評価についてさまざまな結果が出ており、これらの先行研究を分析することは必要不可欠である。

本論は L1 ライティングと L2 ライティングの特に修辞パターンに関する転移と評価の先行研究から得られた結果を検証する。そして先行研究で指摘されていない点を補い、修辞パターンの転移と評価について再検証をしようとするものである。修辞パターンに関する L1 と L2 ライティングの研究がこれまで明らかにしてきたことを整理し新たに検討することは今後の研究に大変重要な意義があると思われる。

A Qualitative Study on Culture Shock: The Shock Factors and Coping Strategies of First Year “Jun-Japa” Students in English-Medium Instruction

教研 修士 3 年 山崎 えりか

Culture shock is well known for the U-shaped curve developed by Sverre Lysgaard (1955), depicting the stages of adjustment people undergo when residing in a new culture. Some researchers interpret this shock as a sickness, while others claim it to be a positive experience in learning about the host culture. However all researches may come to an agreement that culture shock are the “...multiple demands for adjustment that individuals experience at the cognitive, behavioral, emotional, social, and physiological levels, when they relocate to another culture” (Chapdelaine & Alexitch, 2004, p.168). People may register “culture shock” as an overseas issue. Nevertheless, it is as likely to

happen within one's own country as well.

“Jun-Japa” students are Japanese who completed education in Japan and have not resided overseas more than 90 days. Considering such background, they may go through culture shock in English-Medium Instruction (EMI) schools. However, since most studies have focused on international students and sojourners, EMI students have rarely been studied. Moreover, most culture shock studies are quantitative which overlook individual experiences.

Key questions are 1) Are the first year Jun-Japa EMI students experiencing culture shock? 2) If so, what type of shocks do the EMI students' lack of English skills cause? 3) What is the relationship between their English skills and different types of shocks? 4) How do their shock(s) change overtime? What coping strategies were used? 5) What factors can make their shocking experience on English skills more intense/less severe?

A survey, 3 individualized interviews, and weekly diaries within 16 weeks, in a qualitative manner, analyzes their culture shocks, reasons of their interpretation, and methods to cope with their shock. Keywords found in participants' comments and diaries were categorized into interpersonal, psychological, and physiological symptoms to investigate signs of shock.

Overall, interpersonal and psychological symptoms were the most conspicuous as symptoms. Besides providing English support classes/ school life supporting systems, it is important for Jun-Japa freshman students to have places to socialize with people outside of their small circle of Japanese friends and find places to rely on when interpersonal and psychological issues occur.

Exploring Polite Modal Verbs in EFL Textbooks

教研 博士 3 年 野澤 佑佳子

This study analyses modal verbs in two English as a Foreign Language (EFL) textbooks with two inquiries; 1) what amount of modal verbs are taught and 2)

how they are taught in terms of politeness strategy of English and if the textbooks have any lessons dedicated to politeness strategy. This study particularly focuses on how these textbooks deal with polite request forms by using modal verbs such as *will*, *can*, *would*, and *could*. Firstly, I analysed the textbooks quantitatively by looking through the whole number of modal verbs in them and what amount of modal verbs were used as polite forms. Secondly, the situation and context where modal verbs appear were analysed with a qualitative study perspective in order to investigate how these linguistic forms are taught in textbooks.

According to the numerical analysis, only 10% in all modal verbs in the textbooks dealt with politeness strategy and most of them were polite request forms, which were more frequently seen in spoken dialogues. With regard to the qualitative analysis in the second inquiry, there was only one lesson explicitly focused on polite request forms with modals in the textbook for lower proficiency learners. Another textbook had no explicit lesson for politeness strategy and modal polite forms appeared sparsely throughout the textbook. Another finding was that there was a difference in the size of imposition and distance of interlocutors between spoken and written request forms. While spoken polite request forms were used in casual relationship such as family and friends, written ones were used for people in higher positions. Mostly, the size of imposition was relatively smaller in spoken dialogue than in written forms. Through reviewing these results, the possibility of introducing politeness strategy in EFL textbooks in Japan is suggested.

日本人英語学習者が産出する文法的誤り自動検出についての検討

教研 博士1年 石井 雄隆

第二言語ライティングの研究は様々な研究者によってこれまでなされてきた（沖原，1995；小室，2001）。しかし、評定者間の評価のずれ

(Bereiter, 2003) や採点の手間 (石岡, 2009) などの問題が存在しており、十分に教室内でなされていないということが報告されている (宮田他, 2002; 高田, 2004)。一方で、自然言語処理や機械学習の急速な進歩に伴い、英語学習者の作文における文法的誤り自動検出に関するアプリケーションが様々な形で実装されている (Leacock, Chodorow, Gamon, & Tetreault, 2010)。

本研究では、Lexical Functional Grammar (LFG; Bresnan, 1982, 2001) と呼ばれる文法理論に基づく Xerox Linguistic Environment (XLE) という自然言語解析機を用いて英語学習者の文法的誤りの自動検出を試みた。LFG は、c-structure と f-structure の二つの構造を前提とする。c-structure は、文の形態素を上位の範疇へとまとめ、表層的な統語構造を表す。この c-structure は語順に依存するため、言語間によって異なる。それに対して、f-structure は、表層的な言語形式に影響しないその文の持つ文法的機能を表す。この二つの構造に基づいて入力された英文を分析することができる。この原理を援用し、文法的な誤りが英文に含まれた際、f-structure に文法的な誤りの種類を出力できるようにした。この解析機の長所は、文法理論に基づくアノテーションにより、頑健で一貫した解析が可能なことである。また誤りを検出することで、採点の手間の問題も軽減または解決できる可能性がある。

今回の発表では、中学校英語教科書コーパスに基づいて約 900 語の語彙を語彙項目に登録し、大熊 (2008) などで紹介されている日本人英語学習者がよく誤りをおかす 1. 三人称単数現在形の -s の脱落や 2. 冠詞の余剰、3. 冠詞の脱落、4. 日本語の干渉、5. 時制の一致などに関する誤りの検出方法について報告する。例文は下記の通りである。

1. *He eat it.
2. *A boys are tired.
3. *Girl is tired.
4. *Today is tired.
5. *We eat it yesterday.

最後に、本研究の限界と今後の課題について議論したい。

The Effect of Graphic Organizers Upon L2 Reading Comprehension

教研 修士1年 紀伊 雄太

This research investigated the effect of the use of graphic organizers (GOs) for 1) collection of points in gist and for 2) comprehension in L2. A GO is a visual representation of the content of a text depicting (a) its discourse structure, also known as the text structure or the hierarchical text structure, i.e. a framework employed by the writer to organize the text in a coherent manner (Jiang, 2012) or (b) a more abstract structure of the information conveyed by its discourse structure. A GO can thus be used as an instructional tool that facilitates reading by providing visual and spatial representations of the text (Robinson, 1997). On the basis of the previous findings about the efficacy of discourse and information structure instruction, the effect of GOs was hypothesized in this study to improve collection of points in gist and comprehension of the text by facilitating construction of a coherent mental model of the text. In this research, two groups of Japanese grade 12 English learning students were given a task based on a text depicting developments of events, but not necessarily in chronological order. One group was provided with a task intended to make the reader follow the points in the text in the order in which they are mentioned (non-GO group); the other group was provided with a task in which the reader was made to use a GO intended to represent the information structure of the same text (GO group). Results of this study showed no statistical differences between the two groups, failing to support the aforementioned hypothesis.

Impacts of English Learners' Proficiency Level, Gender, Major, and Grade on the Frequency of Learning Strategy Use: Class Placement for More Effective Strategy Instructions

教研 修士2年 安田 利典

Instructions for English learning strategies are one of the most significant factors in developing learners' autonomy (Oxford, 1990). To make the instructions more effective, the central question is what strategies instructors should teach to which class. One of the focal points to answer this question is to provide better understanding of factors which can be used for class placement and which have impacts on the frequency of learning strategy use. For example, English proficiency level is usually used for class placement, and previous studies describe its impacts on the frequency of strategy use, showing that instructors may need to spend more time on a wide range of learning strategies in a beginners' class (e.g., Takeuchi, 2003). Other factors such as learners' gender, major, and grade can also be used for class placement. However, impacts of gender have not yet been clear (Ehrman & Oxford, 1989, 1990; Wharton, 2000), and those of major and grade have scarcely been studied. This study aims to understand the impacts of English proficiency level, gender, major, and grade, focusing on English classes in the School of Education at Waseda University.

Participants in three English proficiency levels ($N=353$) responded a questionnaire which included the following two parts. The first part was the Strategy Inventory for Language Learning (Oxford, 1990) used to measure the frequency of English learning strategy use. The second part consisted of questions for personal information including gender, major, and grade. The result of a multiple regression analysis with dummy variables indicates that although their proficiency level has the strongest one, the other factors show some impact. However, the coefficient of determination is relatively low (adjusted $R^2=.158$), showing that the four factors are not influential enough to explain the frequency of learning strategy use. This implies that, for more

effective learning strategy instructions, it may not matter to place students with different characteristics of each factor in the same class. However, the impacts of some other factors such as personality traits and learning styles should also be considered in subsequent studies.

Motivation and Demotivation of EFL Learners in East Asian Countries

教研 修士2年 Liu Xiaofei

In many countries, some students demonstrate more enthusiasm toward the learning of a foreign language than the others. Motivation as an important part of learning a language has drawn many researchers' attention. Most of the researchers on the issue have concluded that students' motivation is an integral part of learning and that it should, therefore, become an essential component of second language learning pedagogy. On the other hand, negative factors such as demotivating experiences also influence learners' commitment and devotion of learning.

Dörnyei (2001) defined demotivation as the “specific external forces that reduce or diminish the motivational basis of a behavioral intention or an ongoing action” (p.143). Demotivating factors are essential factors which negatively influence learners' attitudes and behaviors and hence lead to undesired learning outcomes (Dörnyei, 2001). Several studies concerning Japanese EFL learners' demotivation have been reported (Falout & Maruyama, 2004; Kikuchi & Sakai, 2009). However, the research of demotivation among Chinese learners has not been researched much in the field of foreign language learning. This study focuses on two particular groups of students: Japanese and Chinese EFL learners at tertiary level. The purpose of the present study is to investigate and analyze the demotivating factors of English language learning among the two groups of university students. On the basis of Dörnyei's qualitative study and other previous quantitative studies (Arai, 2004; Dörnyei

2001; Kikuchi & Sakai, 2009), a 22-item questionnaire was developed to gather quantitative data. A questionnaire survey was implemented in two Japanese universities and two Chinese universities in the early March, 2013, with participation of 197 Japanese students and 215 Chinese students. Using factor analysis, four factors were extracted in the sample of Chinese students: (1) Teacher's teaching competence and style; (2) Lack of confidence; (3) Parents' expectation; and (4) Textbook and course content. Same factors were also obtained in factor analysis among Japanese students. Based on these findings, possible demotivating factors among Japanese and Chinese university students were discussed.

生徒の学習スタイルと動機やストラテジーとの関係

教研 博士4年 小林 潤子

外国語学習において個人差の問題は近年多くの論文で取り上げられている（有本, 2012; 上田, 2010; Oxford & Anderson, 1996 など）。学習者それぞれで、得意とする学習方法や環境などがあり、特定の方法や環境がすべての学習者に効果があるわけではない。Reid の 1987 年の研究では、日本人の学習者は、6つの分類（視覚的・触覚的・聴覚的・集団的・身体的・個人的）で知覚スタイルの間に特に大きな差がなかった。1994 年の Hyland の研究でも同様のことが証明されたが、Native の話者が教師である場合には聴覚的・身体的・集団的な学習スタイルが増加したとしている。本研究では、個人差の問題を考えるために、知覚スタイル (Reid, 1987) を中心として、動機づけ、言語学習ストラテジー、英語の能力試験を統合して検証し、学習者の学習スタイルと英語学習に関して考察をする。

課題としては、1) 被験者 78 名の知覚スタイルがどのようなものであるかを Reid アンケートから分類で検証することと、2) このアンケートで因子分析やクラスタ分析を行うことによって被験者たちの個人差を検証すること、3) 動機づけやストラテジーのアンケートと総合して比較

検討することの3点である。

使用するアンケートは、知覚スタイル (Reid, 1987)、動機づけアンケート (Ryan & Deci, 2000; 廣森, 2006 を参考にして作成)、英語学習ストラテジーに関するアンケート (Oxford, 1990) を参考に 10 項目を選んで作成した。

本研究の被験者の傾向は身体的、個人的な傾向が全体としては強いが、一般コースのグループに比べて福祉関係の科目を多く学習するグループでは聴覚的・集団的な学習スタイルを好む傾向が強い。さらにこのアンケートを因子分析で分析したところ、このグループは「実際に何かをやったり実験したりして学習する」という傾向と、「教えてもらったり手本や説明を聞いて学習する」傾向が強く、「教科書を読んだりして学習に取り組む」という傾向はかなり弱いことがわかった。

今後さらにクラスタ分析や相関などの分析を行い、個人的な学習スタイルの好みを検証する予定である。また、動機づけ、言語学習ストラテジー、英語の能力を加えて、学習スタイルとの関係の調査を進める予定である。

英語リズム習得におけるシャドーイングの効果

教研 修士1年 重政 真有子

現在の中学校・高等学校における発音指導は、柴田ほか (2008) による調査の結果、「教師は音声指導自体の重要性はある程度認識しているが、音声指導は難しいものだと感じており、またこのことは実際の指導へも影響を与えている (p.55)。」と報告されたように、英語教育の大きな課題の1つとなっている。西田ほか (2010) は、このような現状の下においては、「実現可能でありかつ効率的な指導はどのようなものか (p.37)」を追求するべきだと述べている。そのため授業内で音読活動として一般的に行われているリピーティングや、近年注目され始めたシャドーイング練習により発音が向上すれば、先に述べたような問題は解消されと考えられる。

リピーティングとは「一定量の言語音声 (e.g. 文など) を聞いてもらい、その後十分なポーズ (pause) をあけ、その間に学習者に聴取した言語音を繰り返す (repeat) ことを求める活動」(門田, 2007, p.28) と定義されている。それに対してシャドーイングは、「『耳から聞こえてくる音声に遅れないようにできるだけ即座に声に出して繰り返しながらそっとついていく』という学習法」(門田, 2007, p.11) である。門田 (2012) はリピーティングと比べて、シャドーイングを行っている際は学習者の注意は提示される音声に常に向けられ、結果として音声知覚の自動化が達成されるのではないかと主張している。

シャドーイングが音声知覚能力に影響するのであれば、授業内でシャドーイングトレーニングを行うことは効果的かつ効率的な発音指導法になると言えるだろう。以上の仮説を元に、本研究では高校生を対象として英語リズム習得におけるシャドーイングの効果を調べた。被験者には12名の高校1年生を選び、シャドーインググループとリピーティンググループ(各6名ずつ)の2つのグループに分けた。各グループ共に1度音声のリスニングをした後に3度の音読練習を行った。練習の前後に各生徒に原稿を音読させたものを録音し、分析・比較を行った。分析にはPraatを用いて、強母音に対する弱母音の長さの割合を計算することで、トレーニング前後でのリズムの変化を調べ、シャドーイングの有効性について考察した。

The Effect of a Segment-and Suprasegment-Focused Teaching on Perceived Comprehensibility

教研 修士2年 杉内 光成

This study was designed to see what effects segment- and suprasegment-focused teaching methods have on the comprehensibility of learners' English as perceived by their interlocutors.

These teaching methods were conducted in two classes of first-year high school students. Each class consisted of 40 students. One of the two classes was

taught in a segment-focused way, and the other was taught in a suprasegment-focused way. Phonological features dealt with were ones suggested in *Amalgam of NS English* (Cruttenden, 2008). The students received instruction on each phonetic item at every one of the 50-minute sessions of the class during the period of about two months. Before and after the treatment, students recorded their own English pronunciation by reading aloud a diagnostic test. These data were evaluated in terms of perceived comprehensibility on a scale of 1 to 5 by three native speakers of English.

The results show that both methods are significantly effective to enhance perceived comprehensibility, possibly because segment-focused pronunciation teaching helps students to reduce the number of phonological errors and, on the other hand, suprasegment-focused teaching helps students to convey the structure of information. Also, the results indicate that although there is no significant difference between these methods, segment-focused class was more efficient than the other class in terms of effect size.

Although conclusive evidence has not been obtained, there is a possibility that specific methods of pronunciation teaching in the classroom can raise perceived comprehensibility and, specifically, segment phonemes should be taught to students with no experience of living abroad at the early stages of their pronunciation training.

A Study of Self-Assessment of Written Production

教研 博士2年 大井 洋子

This study aimed to investigate the characteristics of Japanese high school students' self-assessment on the topic development in their written production. This study also addressed: 1) the characteristics of topic development of the students' English written production and 2) the extent to which the students can assess the topic development in their written productions by themselves.

Oskarsson (1989) presented six advantages of using self-evaluation: 1)

promotion of learning 2) raising level of awareness 3) improving goal-orientation 4) expansion of range assessment 5) sharing assessment burden 6) beneficial post-course effects. Cheng (2008) also showed three implications of self-evaluation as follows: (1) the development of self-reflection on their performance and learning process, (2) the aid to train students to become better raters and learners, (3) students' psychological factors such as confidence and nervousness.

The data analyzed in the present study were essays written by 169 Japanese high school students. Ten of those students lived in English speaking countries.

The students were asked to write an essay for thirty minutes without dictionaries. The topic was: "A foreign visitor has only one day to spend in your country. Where should this visitor go on that day? Why? Use specific reasons and details to support your choice." Then the students assessed their written production with the same assessment sheet, focusing on the elements of structures such as introduction, main body, conclusion and discourse markers. In order to discuss to what extent the students can consistently assess their written productions, I asked one American English teacher and one Japanese English teacher to assess the students' written productions to improve the reliability of assessment, and compared these teachers' ratings with those of the students.

As a result, eight patterns were found in the students' written productions in terms of topic development. According to the result of the Wilcoxon Signed-Rank Test, there might not be significant differences between teacher assessment and student assessment.